

## チヨウサの『トロイルスとクリセイデ』

中山, 竹二郎

<https://doi.org/10.15017/2332984>

---

出版情報 : 文學研究. 36, pp.151-168, 1948-03-30. 九州文學會  
バージョン :  
権利関係 :

チヨウサの『トロイルスとクリセイデ』

中山竹二郎

一

『キャンタベリ物語』に次いで『トロイルスとクリセイデ』はチヨウサの傑作であり、彼の作品中ばかりでなく、イギリス文學を通じて、異色ある作品である。殊に性格描寫や心理展開の扱ひ方が精緻である點から見て、イギリス小説の濫觴であると云はれてゐる。しかしその内容や形式は頗る複雑であり、之を單なるロマンスと見、單なる小説と見ることとはできない。私見を以てすれば、之はロマンスと小説と、叙事詩と劇との複合體である。その構成要素を分析して、作品の複雑性を闡明しようとするのが本稿の目的である。

二

批評家によつて高く評價されてゐるに拘らず、『トロイルスとクリセイデ』は實際には餘り讀まれてゐないやうである。五卷に亘り八千二百餘行の長篇であり、また古い十四世紀の英語で書かれてゐる爲めであるかも知れぬ。そこ

で作品に未だ接しない読者のためにその梗概をまづ述べることにする。

トロイの王プライアムの息子トロイルスは青年騎士として専ら武を勵み、婦女子に對する關心は淺く、寧ろ戀愛については懷疑的な態度をとつた。時にトロイはギリシヤ軍のために包圍されて、その城壁の外は戰場と化し、幾度か戦闘が繰展げられてゐた。然しトロイの町は戰禍を蒙らないで、市民は靜かな生活の營みを續けてゐた。今日しもパレイディアム神社の祭禮で、お社は參詣の人で賑はつた。

トロイにカルカスといふ神官を職とする豫言者がゐたが、彼は早くもトロイの滅亡を知つて敵方ギリシヤの陣營に逃れ去り、その娘クリセイデをばトロイに獨り置き去りにしてゐた。

クリセイデは夫と死別した年若い美女であり、黒い喪服を着て今日の祭禮に出かけた。社頭でゆくりなくも彼女の姿を見たトロイルスは急に激しい戀愛の情を彼女に對して感じた。しかしその戀を告白する術を知らない彼はたゞ獨りやる瀬ない思ひに日夜悶える身となつた。

トロイルスの親友パンダルスは世故に通じた粹人であるが、近頃打つて變つたトロイルスの様子に心安からず、彼を訪れてその苦惱の原因を打明けて話してくれと説く。パンダルスの切なる友情にほだされてトロイルスはその戀を告白する。戀の相手クリセイデはパンダルスにとつては姪にあたるのである。彼は何としても友人の思ひを遂げさせてやり度い一念から、取持ち役を自分から買つて出る。トロイルスに戀文を書かせて之をクリセイデに渡し、澁るクリセイデを説き伏せてその返事を書かせる。時にはトロイルスの馬上の姿をそれとなく彼女に垣間見させる。

未亡人とは云へ生娘のやうにためらひ勝ちな思慮深いクリセイデも伯父パンダダの巧妙を極めた勧めや頼みに、いつとはなくトロイルスを憎からず思ふ心境になる。パンダダはある日自宅で小宴をはり、クリセイデを招く。折からの大雨に伯父の屋敷に一夜を過ぎねばならないクリセイデをば他の客人から遠ざかつた一室に寝かせ、豫て喋し合はせたトロイルスをそこへ案内する。かくて二人の戀人は、パンダダ以外には知る人もなく密かに一夜を歡喜と興奮の中に過し、翌朝きぬぎぬの別を惜しむ。その後も二人は幾度か人目を忍んで逢瀬を楽しんだ。

パンダダがその友人の爲めに盡した勞は報ひられた。

話變つて、クリセイデの父カルカスはトロイに残してゐる娘を自分の許へ連れ歸らうと謀り、兩軍の間の俘虜交換の機會を首尾よく捉へ運動し、結局トロイ方の一騎士の代償としてクリセイデはギリシヤ側に引渡されることゝ兩軍の間に協定された。クリセイデは今や否應なくトロイを去りトロイルスと別れねばならぬ破目となつた。彼女の悲しみもさる事ながら、トロイルスの悲歎絶望は言語に絶した。しかしクリセイデは十日の後には必ずトロイに歸つて來ると固く約束をし、戀人同志は永遠に心變るまじと誓を重ねて、しばしの別離を惜しむ。

ギリシヤ側からクリセイデ貰ひ受けのため派遣されたのはディオメデといふ騎士であつた。彼は彼女を護衛しての歸るさから、早くもクリセイデに言ひ寄つた。

約束の十日が過ぎてもクリセイデはトロイルスの許へ歸つて來ない。その間ディオメデの求愛は切りに續けられ、クリセイデの心は次第に新しい男に傾いて行く。

一日千秋の想ひで戀人を待つトロイルスは書信に托してクリセイデにその心情を告げるが、女からの返事には眞

心の現はれを認め難い。

或日城外で戦闘の際ディオメデと渡り合ひ彼の陣羽織を奪つて来たトロイの武士があつた。その陣羽織には一つブローチが附いてゐた。これこそ正しくトロイルスがクリセイデと別れる日形見として彼女に與へた品である。遂にクリセイデの變心は疑ふべからざる事實となつた。

戀敵ディオメデを討ちとしてトロイルスは戰場に征き彼を探し求めた。一度トロイルスは思ふ敵にめぐり合ひ互に渡り合つたが勝負は決せられなかつた。トロイルスはその後敵將アキリーズの手にかかつて果敢ない最後を遂げた。

### 三

この筋はチウサ自身の考案でなく、大體に於てイタリアのボカアチオ作『イル・フィロストラート』に據つてゐる。またボカアチオ以前には、十二世紀のフランス詩人ブノアが『ロマン・ド・トロア』の中で此の戀愛事件を取扱ひ、十三世紀にはイタリアのガイドウがそれを散文の『ヒストリア・トロヤアナ』で傳へてゐる。トロイ戰役を背景に持つ物語ではあるが、古典文學に基礎がなく、中世詩人がトロイ物語の一挿話として案出したものが、ボカアチオの靈筆によつて華やかな熱情的ロマンスとなつた。

チウサがこのボカアチオのロマンスを種本として『トロイルスとクリセイデ』を書いたことは既に述べた。一體にイギリスの昔の作家は自ら作品の筋を工夫する勞を省いて、借用したプロットによつて創作する場合が多かつた。

その著しい例はシェイクスピアである。彼の『ヂウリアス・シーザ』はノースのプルータークから、『マクベス』はホリンシェドの『クロニクル』から素材を取つた。しかし『シーザ』も『マクベス』もシェイクスピアの創作した藝術作品であることには寸毫の疑を容れる餘地がない。

まさにその如くチョウサの『トロイルス』はイタリアの文豪にその題材を仰ぎながら、全く彼自身の創作であると云ひ得る。全篇八二三九行の中、ボカアチオから取つた部分はその約三分の一にあたる二五八三行で、残り五六六行は純粹に彼の創意に出づるものであることが、學者の研究によつて明にされてゐる。

『トロイルス』の創作年代は一三八〇年——一三八二年と推定される。イタリア旅行から歸つて後、チョウサの詩風が大きな變化を示した頃で、彼の齡は四十才か四十二才の頃、詩作に油の乗り切つた時代である。

一體にチョウサは詩人として取扱うテーマによつて氣分が左右されたい。詩作中に感興が衰へると、そこで筆を投げてしまう。『譽の宮』にしても、『善女傳説』にしても未完成のままであるのは、執筆中に作者がそのテーマに倦きたためであらう。『譽の宮』は地上から遠く離れた天空を舞臺とした神秘を描き出し、『善女傳説』は戀に殉じた女性ばかりの列傳であり、結局彼の趣味には合はない題材であることを自ら感じたのであらう。

チョウサの趣味は多面的で、一方に偏することを好まない。人生への展望は廣くして、清濁併せ呑む包容性を有つ。狂ひのない透明なレンズを通じて人間生活の實現を寫し出し、時には醜惡卑猥な姿を見ても敢て之を避けようとしな。寧ろ人間臭ひ人間に深い同情を示す。斯うした傾向のチョウサが『譽の宮』や『善女傳説』のやうな架空な、或は單調なテーマに長く感興を繋ぐことができなかつたのは十分に想像し得るところである。

しかるに『トロイルス』に於てはその終末まで作者は筆を運んでゐる、といふより寧ろ興趣と同情とに心を滾らせながら創作してゐる。彼の天分と氣質にしつくり合つたテーマを掴んで、詩作の醍醐味を味つてゐるやうである。ボカアチオから取つて来る素材を一應自分の想像の坩堝に溶かしこんで、好みの形に造り變へてゆく創作過程に詩人は大きな愉悅を感じたに違ひない。

さて『トロイルス』がその種本の『イル・フィロストラート』と相異なる重要な點は、(一)パンダルスは原本ではクリセイデの従兄になつてゐるのを、ウサは伯父にしてゐる。従つてパンダルスは二人の戀人よりも相當に年上のふけ役を演ずる。(二)ボカアチオに據ると、クリセイデは誘ふ水あらば往なんとぞ思ふ型の女で、でもなくトロイルスの求愛になびく。之に反し、ウサのクリセイデは容易に戀人の愛に酬ひようとしなない。従つて粹人たるパンダルスがその辯舌と策略とを用ひ、伯父といふ有利な立場から彼女を口説くにしても相當に心膽を碎かねばならぬ。

此の二つの點は、ウサの藝術的意圖に因つて故らになされた改竄である。現實の人生の空氣の通らぬ密閉された情熱愛欲の靈室に、一陣の涼風を入れ自然の陽光を射し込ませようとする意圖、言葉を換へて云へば、此の濃艶にして甘美な物語に實人生の裏付けをしようとする詩人の構想によるのである。若い戀人と年輩も同じ青年でなく、世故に長じ如才のない、多辯で諧謔を好む、中年の粹人をこの物語の中に導入することは、單純なロマンスを複雑化し現實化することになる。それにはクリセイデの性格をまづ複雑化することが必要である。そして手剛い彼女を巧に操るべくパンダルスが活躍する。

斯うした修正を受けたこの物語は中世ロマンスとしての形體の中に近代小説の實質を有つことになる。ロマンスの

華麗馥郁さと、ノヴェルとしての心理性格描寫の確かさを兼ね備へて來る。多くの批評家が此作品を近代小説の濫觴であると讚美する所以である。

#### 四

『トロイルスとクリセイデ』をまづロマンスとして考へてみる。中世ロマンスには幾つかの規定ないし約束があつて、作家は之に準據して制作をした。之は近代古典劇に於けるかの三一致の法則などと軌を一にするもので、いやしくもその傳統に屬する作家にとつて之を無視しての制作はあり得ない。さて今問題にしてゐる作品に於ても無論ロマンスの規定が守られてゐるが、とり分け我々が注意すべきは、コオトリ・ラヴの約束である。

ロマンスに於て騎士が婦人を戀する場合に、定められた戀愛道を踏まねばならぬ。之に悖つた言行があつたときにはコオト・オヴラヴによつて裁かれる憂目さへ見ねばならぬ。この騎士戀愛道には幾何條といふ項目から成る一の法典さへあるが、その主要な精神は、騎士は婦人に對して對等の戀人といふのでなく、ひたすら謙讓抑遜の奉仕者として彼の情意を捧げ、その奉仕が嘉納されることを哀願するといふ極めて卑下した求愛の態度をとること。また戀愛と結婚とは兩立しないものと考へられ、配偶者のある男女も戀をし戀を受ける自由を享有すること。次に戀愛は當事者間の絶體秘密事項であり、わが戀を他人に語りそのため世間に浮名を立てられることは戀愛の外道であると考へられることなどである。

第一の女性優越の規定は中世ロマンスに於ては殆ど殆く見られ、いま更説明を要しないほどであるが、一例を『ト

ロイルス』から取ると、トロイルスはクリセイデに對し、己を「御身の偽りなき心變らぬ卑しき下僕」たらんことを願ひ、「いかばかり苦しき思ひあらんも、御身の御意は何にてもあれ悉く喜びもて之に副ひ參らするためにあらゆる勞を厭はじ」。 (三卷一四一—六行) と誓つてゐる。クリセイデは男の戀を受け容れはするが、彼に對して「君は王子にましませども、妾を抑へる戀の主權を有ち給はず」 (三卷一七一—二行) と主張することを忘れなかつた。

次に戀愛と結婚との非關聯性については、トロストラムとイソウルドの悲戀物語がよく之を例證してゐる。妻を嫌つたトロストラムとマアク王の妃となつたイソウルドとの間には、嘗て彼等が互に未婚の時に誓つた戀の情熱がトロストラムの死の間際まで續く。『トロイルス』の場合クリセイデは夫と死別した未亡人であり、トロイルスは獨身であり、全く自由な立場に置かれてゐる。しかし彼等が求め合ひ語り合つたのは戀愛であり、結婚には一言半句も觸れてゐない。戀愛は結婚をその目的とするものでなく、また結婚は戀愛を制約することができないといふのが中世ロマンス作家の理念である。

戀愛の秘密を保つべしといふコオトリ・ラヴの掟は『トロイルス』に於て完全に遵奉されてゐる。戀人二人は發端から破局に至るまで近親交友にもその心情の一端さへ漏らさない。もつとも人目を忍ぶとは云ひ條、戀の成就を援ける第三者の介入することは妨げないのである。例へば『キャンタベリ・テイルズ』の『騎士物語』に於て、最初にエミリア姫を戀したバラモンはアアサイト己が戀を告白してその援けを乞ふてゐる。『トロイルス』に於けるパンダルスは女童になつて二人の間の仲介と連絡に努め、彼等の戀の進行過程を具さに知つてはゐたが、之を他の局外者に感づかれないために苦慮し策謀する。そして秘密に蓋を開けたこの戀愛悲劇は秘密のうちに幕を閉ぢる。

コオトリ・ラヴに於ては表現の典雅が要請される。戀人に對し己が熱情を告白するときも、騎士が戀愛一般を論談するときも、優雅甘美な言葉使ひが期待される。情熱の強烈さだけでは足りないのである。サ・ガウエインは天下に双ぶものなき勇士である故に、その戀愛談も雅麗であらうと、彼を初めて見る婦人達は想像する（『文學研究』第三十四輯拙稿「サ・ガウエインと緑の騎士」参照）

『トロイルス』に於ける戀人間の對話が修辭的であるのは勿論であるが、他面また論理的でもある。中世はスコラ哲學の榮えた時代であり、修辭學とともに論理學が主要な學問の一部門であつた、その影響であらうかロマンスにも理屈が頗る多い。或る問題や情勢を色々な角度から検討推論して一の結論を得ないでは安心できぬといふ態度が作中の人物に見られる。『トロイルス』には特にこの傾向が強い。クリセイデは婦人としての面目を汚すことなくして、トロイルスの戀を如何に受けるべきかをパンダルスと論じ合ひ、トロイルスは別離の苦惱に耐えるべきか或は戀人ともに町を落ち遁げてその戀を完ふすべきかといふ問題を吟味するのに委曲を盡す。

かやうに戀人が自分の置かれた或る特殊な環境立場を、形式論理的な辯證を以て検討したり、またその場合の自分の感情を解剖して縷々として述べるあたりは、このロマンスの近代讀者にとりては理論の過剩と感ぜられるのであるが、更に進んでは特殊な立場から離れた一般的な哲學論議が展開されることも屢々ある。例へばトロイルスが凶夢を夢みて心を悩ましてゐるのを慰めるために、パンダルスは夢の眞實性を否定するべく、夢に關する古今の諸説を引用

して辯ずる（五卷三五八一—三八五行）。また別離の悲しみに耐えないで自害の覺悟を決めて泣き濡れてゐるトロイルスは宿命と自由意志の問題について滔々として論ずる（四卷九六〇—一〇七八行）。これは中世趣味の一の現はれであり、ロマンスの甘味に添へられた藥味として鑑賞されるべきであらう。

六

『トロイルスとクリセイデ』はロマンスの中にエビック（叙事詩）の形式を取入れてゐる。

まづ叙事詩の特殊の形式の一つとしてインヴァイシユンがある。詩人は卷頭に於て詩神に呼び掛けてその靈感を祈願し、或は主題に關聯を有つ神々の恩寵を禱る。イギリス叙事詩の典型である『失樂園』の第一卷でミルトンは天上の詩神に祈願し、第三卷では天空の光明に禱つてゐる。『トロイルス』では第一、第三、第四の卷頭でそれぞれティンフォニ（復讐神中の一柱）、ウァイナスとクライオピ（叙事詩の詩神）、及びフウリイズ（復讐神）にインヴァイシユンしてゐる。しかし之は一種の序詞であり重要視するほどのことはない。

重要なのはエビック文學の要素であるエビック・シミリ（叙事詩的比喻法）であり、これはただの形式や修飾に止まらないで作品に實質的な影響を與へる。エビック・シミリは普通の比喻に較べて精巧緻密であり、本筋から離れてそれ自體獨立した美的鑑賞の對象となることが多い結果、プロットの進行が緩漫となる。従つて物語の進展にばかり興味を有ち、比喻の目出度さを味ふだけの餘裕のない讀者にとつては、此種の作品は隨所に倦怠感を覺えしめる。しかしそれは讀む人の心構への問題であり、作者の罪ではない。『失樂園』からエビック・シミリの一例をとると、奈落

の火の湖に及び群る天使達を叙して「そは天使等にて、茫然として横はる姿は、ヴァロムプロサの小川を蔽ふ秋の葉の繁きがごとし、其處にはエトルリアの森弓形高く蔭をなす」以下八行に亘る長い有名な一節がある（一卷三〇一—三一一行）。マッシュウ・アアノルドの叙事詩『ソオラブとラストム』にも此種の比喩が多い。ポーアの『捲毛の強奪』は眞のエピックでなく擬體英雄詩であるが、やはり傳統的にシミリが多く用ひられてゐる。

さて『トロイルス』に豊富に用ひられてゐるエピック・シミリの例を二二擧げてみよう。獨り思に沈んでゐたトロイルスがパンダルスからわが戀の有望なることを告げられて「まさに夜の寒さに花を閉じて低くうなだれたる草の、陽の光を受けて起き上り爛粲として花開くごと、トロイルスは氣を取直し……」（二卷九六七行以降）。またクリセイデが戀人を初めて抱擁して彼と一夜を共にする場面を叙して「甘き忍冬の樹に纏ひ纏るごと二人は互に腕を捲き合ひぬ」と喩へ、續いてクリセイデを形容して「初心な羞らひ勝ちなる夜鳴鳥は、牧羊者の聲を聞き、または垣根に人の動くを見ては、轉り初めてまづ躊躇ひ、やがて高く強く鳴音をぞ立つる。その如くクリセイデは不安の心とけて、思ひのたけを彼に語りぬ」と叙し、更にその時のトロイルスに轉じて「運命極まりて死を覺悟しゐたる人の、圖らずも救ひを得て窮地を脱し、安らかなる心境に入りし如く、トロイルスは戀人を得て喜びぬ」（以上三節とも三卷一二三〇—一二四五行より）と語つてゐる。

## 七

中世に榮えたロマンスと近代小説との相違は畢竟人生を如何に取扱ふか、現實に對し作家が如何なる態度をとるか

といふ問題に歸すると考へられる。『トロイルス』の作者が一方に於て、叙事詩の要素を含むロマンスとして中世の傳統に従つてこの戀愛事件を取扱つたことは疑を容れぬ事實であるが、他方に於て人間生活をその現實の様態に於て把握しようとするこの作者の強い傾向の故に、また主要人物の心理の動きやその性格に對する洞察の深さの故に、中世文學の傳統の埒を越へて近代の寫實主義に近い眞實性をこの作品に有たしめたことも亦認めざるを得ない事實である。此作品が形式的には詩であるが近代小説の實質を具へてゐる所以である。

また更にチヨウサが天才的なドラマティストであつたことを茲に想起せねばならぬ。『キャンタベリ・テイルズ』の各物語を繋ぐ連鎖に於て彼等巡禮衆が如何に演劇的に描出されてゐるかは言はずもがな、彼の作品の隨所にシチュウエイションの巧妙な表出と、對話の効果的なやり取りを指摘することができる。無論本格的な形態を取つた劇はチウサには無い——また有る筈がない、時代が二百年早過ぎたのである——しかし劇的要素の裕かさが彼の作品を特色づけてゐることは明である。

さて『トロイルス』を劇的要素を多く含んだ小説といふ面に於て觀察してみよう。まづ性格の創造とその描寫に付して。

三人の主要人物中トロイルスは熱情的な一青年であり、ロマンスの主人公型であり、その性格は比較的單純である。クリセイデに至つては、作者が宮廷關係の貴婦人達の一人をそのモデルにしたのではないかと想像されるほど鮮明な生きた姿を見せてゐる。彼女は思慮深い。身を窮地に陥れることを恐れる。物の考へ方は現實的で打算的である。トロイルスの戀を受け容れたのも相手の男や伯父から不興を蒙ることを恐れた動機が手傳つてゐる。頭は敏捷に

働く女である。トロイへ歸るために父たる豫言者を黃白の力で籠絡する計畫を自ら語つてゐる程である。しかし他面に於ては極めて朗かで、みづみづしい、無邪氣な女でもあつた。笑ひと諧謔を好み、通人たるパングダルの機智戲言に對して好箇の相手役である。世慣れた刀自の賢明さと、處女のやうなあどけなさとがその中に背馳しないで存してゐる、といふ複雑な性格である。シェイクスピアのクレシドの場合の如き娼婦的の輕薄さを見せてゐない此の女が何故トロイルスを裏切つたか、新しい戀人に心を移してゆく心理の過程は如何であつたか。此の問題は明確には解決されない。彼女はトロイルスとの戀愛の體驗によつて戀愛の醒酷味を知つた、謂はゞ戀愛中毒に罹つたと解するジュスランの説（英國國民文學史一卷三〇九頁）も此の問題の底を衝いてゐない。作者が舞臺をトロイの町に置き、城壁外の世界に深く立入らなかつたためであらうか、或はクリセイデに強い同情を有つ作者が、彼女の痛い所をそつとして置き度いといふ人間の愛好心のためであらうか、彼女の第二の戀愛事件が何となくぼかして扱はれてゐるのは讀者にとつては物足りない。（チウサはクリセイデの不實は既に青史に誌されてあるのだから、彼女を更に責めようとは思はない〔五卷一〇八六行〕と言つて、さながら罪を犯したわが娘を庇うやうな態度を示してゐる。）

パングダル——ロマンスでは脇役であらうが、小説では主人公の貫録を具へてゐる——はチウサの創造した性格では宿屋の亭主ハリ・ベイリや多情なワイフ・オヴ・パスとともに傑作である。女主人公の伯父となつてゐる事から考へて、年の頃四十くらゐであらう。（作者の年齢もその頃四十を少し越へてゐた。）圓熟した通人で、友人の戀を叶へてやり度いばかりに様々な策動はするが、根がお人善しである。多辯で善く諧謔を弄し頓智に長けてゐる點フォオルスタフを想はしめる。またお世介な點ではボロウニアスに似てもゐる。終始トロイルスの腹心の友として、彼の

戀の成就を喜び、クリセイデの不實を悪む。なるほど彼は高貴な性格ではない、しかし彼の名に因んで造られた英語が意味するやうな慾得づくの取持役でないことは明かである。

世故に長じ、人生を享樂し、いつも屈託のない四十がらみの此の男が果して作者の純粹な想像によつて創造されたか、或は當時の實在人物の中に作者がモデルを得て描出したか、それは恐らく益のない詮議立てであらう。しかしチウサの讀者は此の男の中に何となくチウサその人の面影を見る。宮廷人として、外交使節として、税關吏として様々人生の明暗を體驗し、しかもその人生に對しにこやかに微笑みかけてゐるチウサの一面はたしかにパンダルスに髣髴たるものがある。さう見れば此作品の中に展開されるパンダルスの性格は作者の半面的な自畫像とも云へよう。半面的といふ理由は、チウサには實際的な享樂的な傾向の他の半面に、讀書にいそしみ詩道に精通する生活があつたからである。

## 八

『トロイルス』が小説或は劇としての寫實性を強めてゐる要因の一つは巧妙に遣取りされる科白である。俗語調の對話を技巧的な詩節の中にはめこめてゆく手法はチウサ獨特のものである。『トロイルス』は所謂ライム・ロイアルといふ七行三脚韻の詩節で書かれてゐるが、かうした比較的複雑な詩形の數節を通して、俗にくだけた口語調の對話が續くのを読むと、韻律脚韻の拘束を受けない散文の自然さを感じる。例へばパンダルスがトロイルスの戀をクリセ

イデに初めて告げるために彼女を訪れ、さりげない様子で他愛ない世間囁をしながら相手の好奇心をそり立てて、結局肝腎な用談の糸口を切るあたり、巧緻輕妙な對話が長く續く（二卷七八—三一五行）。またパンダルスが見事に成功してクリセイデは初めてその戀人とともに一夜を過して、翌朝きぬぎぬの別れを惜しんで歸宅する。その朝パンダルスは姪を訪れて擲揄を浴びせる。クリセイデは羞を含みながら言葉を返し、からくりを弄した伯父に戯れつつ怨みを言ふ一節の科白の遣取り（三卷一五五五—一五七五行）は實に絶妙と評する外はない。

## 九

讀後も猶描寫された場面の多くが讀者の腦裏に燒附けられるとか、眼前に髣髴とするとか云はれるのは、その作品が視覺性に富むことを意味する。劇文學に於て此の視覺性の重要なことは勿論であるが、小説の場合にもこれはその成功の要因をなすことが多い。『トロイルス』は視覺性に富み、一讀の後深く印象に残る好場面が多い。一二の例を擧げてみよう。

クリセイデはトロイルスが自分に寄せてゐる熱情を知る。それは嬉しくもあり、また恐ろしくもあり、彼女はこの王子の戀を受けるべきか否か決しかねてゐる。たまたまその時彼女の友の唱ふ戀愛歌は、迷へる彼女の心に温い和らぎを與へる。夜になつて彼女は獨り寢室に入る。部屋の外の緑深い杉の樹に一羽のナイティンゲイルが棲つて、美しい月光を浴びて囀り鳴く。それは鳥ながらに妻を慕ふのであらう。クリセイデは清々しい悦ばしい心地で、し

んみりと此の歌に聴き入りながら深い睡に落ちてゆく（二卷八二四——九二四行）。美しい浪漫的な情景であり、しかもそれは女の心が戀に惹かれてゆく心理過程を示唆してゐる。

次は悲喜劇の一場面。クリセイデが歸つて來ると約束した日もはや暮方になつた。トロイルスはパンダルスを伴つて城壁の外を遙に眺めながら、待てども待てども歸らぬ人を待つてゐる。夕暗が迫つて來る。諦めてそこを立去らうとする一刹那トロイルスの眼には戀人の姿が遙か彼方に見える。彼が指す方をパンダルスが見やれば、それは一臺の荷馬車に過ぎなかつた（五卷一一四二——六二行）。なほ此處で二人の友人の間に取交はされる俗語調の對話の自然さが情景を浮上らせてゐる。

## 十

場面の良さ、對話の巧みさ、心理描寫の緻密さ、性格描寫の鮮明さ等傑れた小説や劇としての要素を豊富に有つ『トロイルス』は十九世紀のイギリス小説に比しても遜色を見ないであらう。三人の主要人物、殊にパンダルスとクリセイデは生きてゐる人間である。我我がその息吹を感じ體臭を嗅ぐほどに眞實性を具へた人間である。彼等の住むトロイの町はベキ・シヤアの住む十九世紀のロンドンであり、ベピットの住むアメリカ中部の都市でもある。まことに此の一篇は現實の人間社會の中に生を營む人間の記録である。

最後に作者チョウウサに對しいささか讃詞を呈して本稿を結びたい。純文學と云へばロマンスやフッブリオウが専ら榮えた十四世紀に於いてチョウウサは十六世紀の劇作家や十九世紀の小説家と伍して遜色を見ない作品を書いた。天才はその時代を超越する。彼はその時代から數世紀も先んじてゐた。のみならず更に彼は當時の歐州文壇に於ても最も傑出してゐた。フランスの批評家ジュスランに據れば、文藝復興初期の四大作家として、イタリアのピイトラックとボカアチオ、フランスのフルワサル、イギリスのチョウウサを擧げることが出来るが、その中チョウウサが最大であると(『シエイクスピア時代のイギリス小説』四三頁)。

またコオタブ教授に従へば、チョウウサの詩人としての最高の功績は歐州大陸の最秀文化を移入したことである。フランス文學作品の翻譯や、或はその精神によつての詩作もさることながら、それよりもイギリス文化の擴大に遙に重要なことは、イタリア文學に對する彼の親炙であると(『詩に於ける生』三二一頁)。まことに『トロイスとクリセイデ』の一篇こそイタリア文化移入の金字塔である。

作家プロコッシユはチョウウサを評して、小説作家として彼は據るべき先例がなかつたに拘らず、誤らない直感によりイギリス小説を正しい方向にむけて發足せしめたと言ふ(ヴァアコイル編『イギリス小説作家論』一五頁)。借用の名人でもあり、同時に創造の鬼才でもあるところに、チョウウサの作家としての偉大さがある。

註

本稿の中では植字の便宜上、原語の挿入や原文の引用を一切避けた。その補ひとして、假名書きにしたり翻譯した名前の原語の主なものを茲に表示して讀者の参考に供する。

アアサイト……………Arcite.  
 イソウルド……………Isolde.  
 インヴァケイション…Invocation.  
 エピック・シミリ…Epic simile  
 エミイリア……………Emelia.  
 カライオピ……………Calliope.  
 カルカス……………Calchas.  
 「騎士物語」………  
     ‘The Knight’s Tale’  
 「キンタベリ物語」………  
     ‘The Canterbury Tales’  
 ガイドウ……………Guido Colonna.  
 「ヒストリア・トロヤナ」  
     ‘Historia Trojana’.  
 コオタバ教授……………  
     Prof. W. J. Courthope.  
 「詩に於ける生」…  
     ‘Life in Poetry’ London. 1901.  
 サ・ガウエイン……………Sir Gawain.  
 視覚性……………Visuality.  
 「失樂園」……………‘Paradise Lost’  
 ジュスラン……………J. J. Jusserand.  
 「英國民文學史」…  
     ‘A Literary History of the  
     English People’, London,  
     1925—6.  
 「シェイクスピア時代の……  
 イギリス小説」  
     ‘The English Novel in the  
     Time of Shak’, London,  
     1899.  
 「善女傳説」………  
     ‘The Legend of Good Women’.

ディオメデ……………Diomee.  
 トリストラム……………Tristram.  
 トロイ……………Troy.  
 「トロイルスとクリセイデ」…  
     ‘Troilus and Criseyde’.  
 マアク……………King Mark  
 マシュウ・アアノルド………  
     Matthew Arnold.  
 「ソオラブとラストム」………  
     ‘Sohrab and Rustum’, (1853).  
 ノース……………Sir Thomas North.  
 「譽の宮」……………  
     ‘The House of Fame’.  
 ホリンシェド… Raphael Holinshed.  
 ベビット……………  
     Babbitt (the hero of a  
     novel by Sinclair Lewis).  
 ハリ・ベイリ……………Harry Bailey.  
 パラモン……………Palamon.  
 パレイディアム… Palladium.  
 パンダルス……………Pandarus.  
 ビイトラアク………  
     Francesco Petrarca (1304—74).  
 ファブリオウ……………Fabliau.  
 フォオルスタフ… Falstaff.  
 プライアム……………Priam.  
 フルワサアル………  
     Jean Froissart (1337?—1410)  
 フウリイズ……………Furies.  
 ベキ・シャープ……………Becky Sharp.  
 ボカアチオ……………  
     Giovanni Boccaccio (1313?—75).  
 「イル・フィロストラト」………  
     ‘Il Filostrato’.  
 ボウブ……………Alexander Pope.  
 「捲毛の強奪」…  
     ‘The Rape of the Lock’ (1712)  
 ポロウニアス……………Polonius.  
 ライム・ロイアル… Rhyme-royal.  
 ワイフ・オヴ・バアス………  
     The Wife of Bath (in ‘the  
     Canterbury Tales’)